

# ナラティブ・アプローチによる経験の振り返り

## －「人生紙芝居」を用いた試行的実践－<sup>1</sup>

糟谷知香江

A reflection of experience from narrative-based approach:  
Life story review using a Japanese picture book

Chikae KASUYA

本論では日本の福祉現場で生み出された技法である「人生紙芝居」を中米・コスタリカにおいて活用した事例を報告する。コスタリカでのフィールド調査において、スラムに暮らすニカラグア人夫妻にインタビューを実施して生活史を聞き取った。そして、その生活史をもとに紙芝居を制作して、語り手と家族の前で上演した。考察では、この技法の利点についてナラティブ・アプローチの観点から以下の仮説を提示した。(1) 語り手の経験が生じた順に整理される、(2) 語り手に自らの経験への理解を促進させる、(3) 他者との交流手段となる、(4) 紙芝居は、絵があるので内容が子どもにも伝わりやすい。以上のように、人生についての紙芝居、そして紙芝居の制作過程とが心理的支援の機能を有している可能性が示唆された。

キーワード：事例研究、ライフストーリー、移民、コスタリカ

人の生涯とは、人が何を生きたかよりも、  
何を記憶しているか、  
どのように記憶して語るかである。

(García Márquez 2002, 且訳2009, p.11)

### 問題と目的

ラテンアメリカにおける移民には大きく2つの流れがあり、1つは米国など地域外への移民、もう1つはラテンアメリカ地域内の移民である。後者の1つが本研究で扱うニカラグアからコスタリカへと向かう移民である。故国を離れて移住する人は、移住先で経済的基盤を確立し、異なる社会・文化に適應していく過程でときに困難を経験する。本論では、コスタリカ在住のニカラグア系移民夫妻の生活史を主題とする紙芝居を制作した実践について報告する。そして、この実践が心理的

支援としてどのような意義を持つか検討する。

### 経験への意味づけ、ライフストーリー、ナラティブ

人生においてはしばしば困難な出来事が生じるが、こうしたときに人はその経験を自分なりに意味づけようとするといわれている (Frankl, 1969)。経験への意味づけによっては自己の成長感が得られ、ポジティブな変容が生み出されることがある。その結果として、同じような困難を経験している人々を援助するといった社会的活動に従事することにもつながる (安藤, 2009; 堀田・杉江, 2013)。このように、人生において困難な経験が持つ意味を生成させること、つまり有意味感を回復することは、後の生活への適應に寄与すると考えられている。

経験を意味づける過程では、個人の人生についてのストーリー、すなわちライフストーリーが生み出される。ライフストーリーにおいて経験がどのように語られるかは、事実がどうであったか以上に重要であると考えられる (Atkinson, 1995)。なぜならライフストーリーは、自分はどういう人

<sup>1</sup> 本研究は平成24～27年度科学研究費補助金 (課題番号: 24617014 代表: 糟谷知香江) の助成を受けたものである。

間なのか、自分にとって大切なことは何か、自分が人生で何を行ったか、などについての説明であり、自分の人生に正当性を与えるものだからである。経験は、個人の頭の中での思考、他者との会話、といった言語行為を通して把握されるといえる。

語るという行為はナラティブという概念で論じられている。ナラティブは時間性・意味性・社会性という3つの側面を持つと考えられる (Elliott, 2005; 野口, 2009)。まず第1に時間性とは、語り手の経験した出来事が生じた順番に整理されることである。私たちは様々な経験の記憶とともに生きているが、それらの記憶は普通、未整理なままである。しかし、経験を他者に語るときは、それらがいつ起こったのか言及するので、最終的には出来事が時間軸上に整理されるのである。第2に意味性とは、語ることによって出来事との関連性が確認されることである。個々の出来事がどのように自分に影響したのかを語ることを通して、ライフストーリーに一貫性が備わっていく。また、経験が他者に語られるときには、人生における無数の出来事の中から一部が選択されて語られる。何が語られて、何が語られないか。この選択の仕方も出来事に対する語り手の意味づけを表すと考えられる。第3に社会性とは、語るという行為が他者との交流のなかで成立することである。語りには聞き手の存在が必要であり、語られる内容は聞き手の知識や関心に応じて変化する。また、語りを通して他者と交流することが社会的適応を促進するという点も重要であろう (Bruce, 1999)。

人と人との交わり、すなわち社会的行為が社会や文化のあり方を決めているという考え方は社会構成主義といわれる。近年、この社会構成主義に基づくセラピーが心理学、社会学、福祉学などさまざまな学問領域に影響を与えている (McNamee & Gergen, 1992)。主な潮流としては、ナラティブ・セラピー (White & Epston, 1990)、リフレクティング・プロセス (Andersen, 1991)、コラボレイティブ・アプローチ (Anderson, 1997) の3つを挙げることができる。

社会構成主義的なセラピーにおいては、「語られたもの」を他の人々と共有することが重視され

ている。たとえばナラティブ・セラピー (White & Epston, 1990) は、セラピーをセラピストとクライアントの対話プロセスととらえる。対話の中でクライアントの経験した出来事に新たな意味を見つけたり、問題を解消する方法を共に構築していく。そして、治療過程の一部として、対話の中で語られたことが文書でクライアントに渡されることがある。これによりクライアントは、セラピストと自らのストーリーを再度共有し、対話において構築された現実をより確かなものとして感じられるのである。ストーリーの共有というのは、家族や友人といったクライアントの周囲の人々との間でなされることにも意義がある (田代, 2008; Winslade & Monk, 1999)。個人の人生は周囲の人々との関わりの中で進んでいくので、自分自身についての説明は、周囲の人々から自分がどう受け止められているかということから影響を受ける。もし、自分の新しい一面を自分自身が認めたいのなら、周囲の人々にもその面を知ってもらおうとよい。つまり、自分についてのストーリーは、関心を持って耳を傾けてくれる人々がいるからこそ、より確かなものになりうるのである。

他者の存在は、社会構成主義的セラピーの一つであるリフレクティング・プロセス (Andersen, 1991) においても重要である。リフレクティング・プロセスは家族療法から生み出された技法であるが、そこではまずセラピストと家族との間の面接を、リフレクティング・チームと呼ばれる担当セラピスト以外の専門家集団がワンウェイ・ミラー越しに観察する。そして次のリフレクティング・プロセスにおいて観察する人とされる人を逆にし、家族とセラピストはリフレクティング・チームが自分たちの行った面接について語るのを聞くのである。この時間は、クライアントにとっては単に「聞き手」の役割を果たす時間ではなく、意識の次元で自分自身と対話する時間でもある。私たちは他者による会話を聞いている間、自分自身とも会話しているからである。この自分自身との会話を Andersen は「内的会話」と呼び、これに対して他者に語ることを「外的会話」と呼んでいる。リフレクティング・プロセスにおいては、特定の話題が外的会話から内的会話へ、そして再び外的会話へと移行することにより、両者の視点

表1 ライフストーリー・インタビューの利点 (Atkinson, 1995より作成)

1	自分自身の体験と感情についてよりはっきりとしたものの見方を得ることができる。また、そうすることで、人生に大きな意味が与えられる。
2	人生が明確になれば、自己認識が深まり、より肯定的な自己イメージと自尊心を得ることができる。
3	自分の大切な体験と洞察を他人と共有できる。
4	ストーリーを他人と共有することで、大きな喜び、満足、内面の平穏を得ることができる。
5	ストーリーを共有することで、ある種の重荷が清められ解き放たれ、自分自身の経験に正当性が与えられる。事実、そのような正当性の獲得の心理プロセスは、苦悩からの回復プロセスの中心的なものである。
6	ストーリーを共有することで、大きな人間共同体に自分を関係づけることが容易になり、考えている以上に、自分が他人と同じものを持っていることがわかるかもしれない。個人的な心理を伝え、共有する集合的な真実が正しいと確信することもできる。
7	自分のストーリーは他の人の人生を違った視点から見られる機会を与え、その人の人生に何らかの変化をもたらすインスピレーションになりうる。
8	私たちの身近な人々が以前にはなかった形で私たちを知りよりよく理解し、そしてたぶんそのことで私たちが愛し尊敬する。
9	自分のストーリーをどのように終わらせたいか、自分が望む「良い」結末をどのように得るかについて理解を深めることさえあるかもしれない。自分の過去と現在を理解することによって、未来のための私たちの目標についてより明確な見方も得られる。

を通過してクライアントに変化が生まれるとされる(三澤, 2008; 矢原, 2008)。リフレクティング・プロセスは、語り手の内的会話を促して自己に関する洞察を深める効果があるといえる。

このように他者の語りを聞くことを通じての自己洞察の深化は、セラピーの文脈を超えて汎用的に活用できると考えられる(Andersen, 1991)。既に述べたように、個人の経験についての意味づけは他者や自分自身との相互作用の中で作り出されるといえるが、これもセラピーにおいてのみあてはまるのではない。人生についてのストーリーを語らせること、すなわちライフストーリー・インタビューについても表1のような利点を挙げる事ができる(Atkinson, 1995)。

以上のように、ライフストーリーを他者に語る事、語られたストーリーが文書などの形をとって語り手に返されること、そしてストーリーが語り手・聞き手以外の周囲の人々にも共有されること、これらのプロセスにより困難な経験が人生の中に意味づけられ、有意味感の回復につながると考えられる。

#### コミュニケーション・メディアとしての紙芝居

現在のような紙芝居は1930年に成立したとされている(上地, 1997)。これは街頭紙芝居で、冒険物語、怪談、悲話など多様なストーリーで子どもたちの人気を集めた。街頭紙芝居の人気の高ま

りを受けて、宗教関係者や幼児・児童教育関係者がメディアとしての紙芝居の影響に注目し、教育へ活用するようになった(石山, 2008)。第2次世界大戦中には日本政府が戦意高揚のための紙芝居(国策紙芝居)を制作したが、戦後は国策紙芝居の反省に立って民主主義や平和思想を伝えるための紙芝居が制作された(鈴木, 2005)。このように多様な紙芝居が制作されたことは、内容の是非はあるものの、紙芝居のメディアとしての影響力を示していると考えられる。

近年、紙芝居は日本国外にも紹介されている。ベトナムでは1990年ごろから紙芝居作家養成のための研修講座が開かれ、地元の作家による作品が出版されるようになっていく。またラオスでも、国際協力NGO「ラオスの子ども」の協力で地元作家の作品が出版されている。2001年には「紙芝居文化の会」が創設され、アジアだけでなくオランダ、イタリア、フランスなどヨーロッパ地域への紙芝居普及を支援している。

紙芝居の形態は、上演者が読み上げる脚本を聞きながら次々と切り替わっていく画面を眺めるといったものである。紙芝居の実践に関わっている人々は、紙芝居が聴衆の間に「集中」と「共感」を生み出すという(野坂, 2007; まつい, 1998)。「集中」とは物語への入り込みであり、画面が次々と連続的に現れることにより生じる。この

「集中」に関して小平（2007）が幼稚園で紙芝居を見ている幼児の反応を検討し、物語がクライマックスに到達したときには身体的な反応が減少し、周囲に誰もいないかのように物語にのめり込んでいることを報告している。「共感」については、まつい（1998）は、上演者と聴衆、さらに聴衆同士で一つの物語を共有することにより生ずると述べている。紙芝居が聴衆を引きつける力を備えていることは紙芝居の歴史からも推測されるものの、実証的研究は少なく、今後の研究が待たれるところである。

紙芝居は、機械を必要とせず、制作も比較的容易で、他のメディアに比べ「手軽」であるという特長を持つ。機械を必要としないということは、活用できる設備が限られているとき非常に有効である。たとえば、Nonakaら（Nonaka, Kobayashi, Jimba, Vilaysouk, Tsukamoto, Kano, Phommasack, Singhasivanon, Waikagul, Tateno, & Takeuchi, 2008）はラオスの小学生を対象としたマラリア予防教育に紙芝居を用いている。また、国際協力 NGO「ジョイセフ（JOICFP）」は、アフリカにおいて、HIV 陽性者への偏見・差別をなくし被害の拡大を防止することを目的として、啓発用紙芝居を制作している。この紙芝居の上演は、村人との活発な質疑応答や意見交換を引き出し、HIV を様々な視点で捉え直す機会をつくっている（JOICFP, 2014）。紙芝居が「手軽」であるもう一つの理由は、制作の容易さである。紙芝居の絵は、細部を省略した簡潔なものが主体である。そして、カード形式であるため製本する必要もない。一般的に紙芝居といえば印刷物であるが、家庭や学校で手作りされる紙芝居もあり、これらは手作り紙芝居と呼ばれる。紙芝居創作の原点は、他の人々と何かを共有したいという気持ちである（ときわ, 2007）。自らの必要に応じて作品を生み出せることが手作り紙芝居の利点といえる。

### 「人生紙芝居」と本論の目的

以上のように手軽であるという紙芝居の特長は様々な活用可能性を示唆する。本論では手作り紙芝居の一種である「人生紙芝居」を活用した事例を取り上げる。人生紙芝居とは個人の生活史を主題とした手作り紙芝居である。奥田（2006）は福

祉施設を利用する高齢者の生活史を聞き取って「人生紙芝居」を制作し、それを誕生日プレゼントとして施設利用者全員の前で上演している。上演会によって、紙芝居の主人公の人生について他の施設利用者たちは理解を深めることができる。人生紙芝居の制作・上演は、社会構成主義的セラピーにおけるストーリーの共有とも重なる。ナラティブが他者と共有されることによってリアリティを増すのだとすれば、他の施設利用者たちという聴衆の前で上演されることは、紙芝居の主人公＝生活史の語り手にとって重要な意味を持つだろう。そして語り手は、自己の人生について語られるのを聴衆の一員として聴き、過去の経験を振り返る時間を持つこともできると考えられる。

本論の調査協力者は中米のニカラグアから隣国コスタリカへ移住した1組の夫婦である。コスタリカは中米の中で政治的・経済的に安定した国として近隣諸国からの移民の受け入れ国となっている。この移民の大半を占めているのがニカラグア人である（糟谷, 2009）。ニカラグアでは1970年代末に政変が生じ、ソモサ独裁政権が崩壊してサンディニスタ革命政権が成立したが、革命政権と反革命勢力の衝突による内戦が勃発し、1980年代はコスタリカへ移住する人々が急増した。1990年代に入ると内戦は終息し、内戦時代に破壊された経済を再建するための政策がとられた。しかし、経済状況は低迷を続け雇用が不足し、80年代以上の数の移民が生じている。また、1998年のハリケーン・ミッチなどの自然災害もニカラグアからの移民の増加に影響を与えている。移住先のコスタリカにおいて、ニカラグア人の多くは農業・建設業・家事労働業における非熟練労働に従事しているが、給与所得者の平均収入はコスタリカ人の70%程度にとどまっている。また、ニカラグア人に対する不寛容な態度がコスタリカの間に見受けられることも指摘されている（López pez & Pernudi, 2007; Sandoval, 2002）。以上のような社会的環境で、コスタリカに在住するニカラグア人の中には、移住前だけでなく移住後も困難を経験しながら生活している者が少なくない。

本論では、ニカラグア系移民である夫妻のライフストーリーから人生紙芝居を制作・上演する試みを通じ、この手法の意義を検討することを目的



とする。人生紙芝居は福祉現場での実践の中から生まれており、その活用の様子から何らかの有効性を備えていることが推察される。Kasuya (2012) はコスタリカにおいて移民女性の人生紙芝居を制作した実践を報告している。本論では、異文化環境においてこの技法がどのような有効性を持つのか、ナラティブの観点から考察して仮説生成することを目的とする。

### 方法と結果

調査協力者のニカラグア人夫妻は、年齢は共に50代である。夫はニカラグアの内戦を契機に80年代にコスタリカへ移住、妻は経済的理由により90年代に移住し、二人はコスタリカで出会って結婚している。調査時には夫妻は娘・孫とともに首都近郊のスラムに居住しており、他の子供や孫たちも近所に居住していた。調査を実施した20XX年、筆者は、スラム内で地域支援活動を行うNGOの紹介で夫妻宅を訪れる機会があり、人生紙芝居を制作することとなった。調査についてまず事前に説明を行い、紙芝居が完成して内容を夫妻に確認してもらい、結果の公表について了承を得た。なお、本論においては調査協力者の個人情報保護のため、氏名、年齢、家族構成、職業、地名に変更を加えている。

人生紙芝居の制作と上演は以下のように行われた。

(1) 面接調査を実施し、生活史を聞き取る：これまでの人生で起こった出来事について、筆者が非構造化面接を実施した。調査協力者が語りやすいように、面接は出生地、家族構成など基本的事項

の聞き取りから始めた。聞き取りに先立って、自分が語りたいと思うことのみを話すように依頼し、過去の経験すべてを語る必要はないことを伝えた。これは、調査協力者が混乱するような事態を回避するためと、紙芝居が分量の関係で人生のアウトラインを描く程度の数の経験しか取り上げられないという制作上の理由もある。

(2) 聞き取った生活史を文章に書き起こす

(3) 書き起こした文章をもとに作画する：紙は八つ切り画用紙を用いた。画材にはクレヨンを用いて、縁取りに黒サインペンを使用した。画材の選択に際しては、紙芝居を上演するときに絵の視認性が良いことを考慮した。なお、(2)～(3)の過程で2回、情報確認のため調査協力者宅を訪問した。その際は、家族も同席して必要な情報を補足・修正した。(1)～(3)における面接は合計約2時間であった。

(4) 紙芝居の仕上げ：文章を書いた紙を作画した画用紙の裏面に貼り付け、透明の保護シートを貼った。

(5) 紙芝居の上演会：調査協力者宅を訪問し、娘・孫も同席のもとで紙芝居を上演した。上演者は筆者である。上演の途中で、夫が目には涙を浮かべる場面があった(場面④)。彼は上演が終わった後、場面④のカードを抜き出し、しばらく眺めていた。また、上演会終了後は夫妻とも満足した様子であった<sup>2</sup>。制作した紙芝居は夫妻に贈呈したが、贈呈前に写真で記録した。写真をもとに再制作した紙芝居を図1に示す。なお、本論では個人情報保護のため絵にも変更を加えている。

図1 制作した人生紙芝居

①今日はみなさんに、ニカラグア湖のそばに住んでいた男の子と女の子のお話をします。みなさんはニカラグアを知っていますか？ニカラグアはどこにありますか？



②ニカラグアはコスタリカの北側にあります。ニカラグア湖はとても大きくて、とてもとても美しいです。男の子はリーバスという町に住んでいました。女の子はグラナダです。



<sup>2</sup> 約1年後に調査協力者宅を再訪した際、続編を描いてほしいという依頼が調査協力者からあり、再度、人生紙芝居を制作している。

③これはリーバスの博物館です。



④オスカル少年はとても働き者でした。畑でタマネギやフリホール豆を育てていました。大きくなってからはパン屋で働くようになりました。



⑤これはマリソルが住んでいたグラナダの教会です。



⑥マリソルは湖の近くに住んでいました。母親は彼女が7歳の時に亡くなりました。彼女は洗濯、アイロンかけ、家の掃除、料理、弟妹の世話をしました。そのため学校に行くことができませんでした。13歳の時、修道女の下で勉強をするようになりました。



⑦1980年代の前半、ニカラグアでは内戦が勃発しました。軍隊は兵士にするために男性を招集しました。それで、たくさんの人々が山へ逃亡しました。オスカルは1985年、コスタリカへ行くことにしました。



⑧1992年、マリソルもコスタリカへ行くことにしました。



⑨コスタリカへ着くと、マリソルはレストランで働き始めました。オスカルはパン職人として働いていました。彼はマリソルの働くレストランの常連でした。マリソルとオスカルは初対面で恋に落ちました。二人はコリマという町で一緒に暮らし始めました。30歳のときのことです。



⑩1997年、一家はレオンにやってきました。土地がもらえるという話を聞いたからです。当時、レオンはコーヒーの木と竹が生い茂っていて、家はなく、水も電気もありませんでした。はじめは椰子の木の下で眠りました。それから木の小屋を作りました。でも、小屋には屋根がありませんでした。一家はたったひとつのベッドと一緒に眠りました。



- ⑪ここレオンで、オスカルはパンを作っています。彼はとても働き者で、それに妻マリソルの大きな助けで、パン屋は成長を続けています。



- ⑫マリソルとオスカルは新しい店と自宅を2002年に作りました。二人の成功の秘訣は夫婦の絆であり、愛情です。



- ⑬いま、マリソルとオスカルは3人の子どもと8人の孫に恵まれ、幸せに暮らしています。



### 考 察

本論は手作り紙芝居の一種である人生紙芝居という技法の新しい活用法を模索するものであり、コスタリカのスラムで生活する移民夫妻の生活史から人生紙芝居を制作・上演する実践について報告した。本論で取り上げたのは1つの事例のみであり、この技法の有効性を判断するにはさらに多くの制作事例を重ねる必要がある。また、調査現場での制約があり、調査協力者がこの実践をどう感じていたのかについては紙芝居上演会での筆者による観察から伺えるのみという限界もある。そこでここでは、今回の実践の意義を整理し、今後の詳細な検討のための仮説を提示したい。紙芝居は文章と絵という2つの構成要素によって成立しているものなので、人生紙芝居の利点をそれぞれについてまとめる。

文章の利点については、時間性・意味性・社会性というナラティブの3つの側面に従って述べる。まず時間性であるが、語るという行為が、混沌とした経験世界を時間の秩序に従って整理したと考えられる。過去の経験は、日常生活においては未整理なままに記憶の中に存在しがちである。聞き手に語るために、語り手にとってより重要な経験が多くの経験の中から選び出され、順序立てられたと考えられる。

次に意味性について述べる。私たちの経験は多義的で、1つの経験も見方によって異なる意味を持つ。他国への移住という経験を例とすれば、祖国の社会的混乱が原因でやむを得ず移住したとし

ても、移住したからこそそこで配偶者となる人と巡り会えた、という理解もできる。つまり困難な経験を、人生上の必要な経験として理解することも可能である。人生紙芝居で取り上げられているのは語り手の人生の一側面に過ぎない。しかし、そのストーリーは語り手が「語りたい」あるいは「語ってもよい」と考えた経験から構成されている。従ってそれらは、語り手にとって望ましい経験、あるいは困難を伴ったとしても克服した経験であると考えられる。つまり、自分の人生に正当性を与えられるストーリーが語り手の前で上演されたといえる。

最後に社会性であるが、これは3点指摘できる。

- ①自らの人生に関心を持つ者＝聞き手（筆者）・聴衆（今回の場合は家族）との交流手段となったこと。
- ②紙芝居上演を通して語り手の人生が聴衆にも共有され、語り手への理解が促進されたこと。
- ③上述のように語り手の人生に正当性を与えられるストーリーが、聞き手や聴衆と共有されることによってリアリティを持ったこと。このように人生紙芝居は、他者との交流手段となりながら、語り手への理解を促進し、語り手の人生に正当性を与えられるストーリーを確かなものにしたと考えられる。

人生紙芝居の文章についての利点は以上であるが、次に、絵によって構成されていることによる利点を述べる。第1に、文章だけではわかりにくいことも絵が補足してくれる点を指摘できる。今回の調査では、就学前の年齢の孫に祖父母の人生

について伝えることができた。

第2に、絵が過去を想起させる点である。紙芝居上演会において調査協力者（夫）が涙を浮かべた場面があったが、これは彼の少年時代を描いた場面④で、紙芝居には畑を眺める少年の後ろ姿が描かれているだけである。したがって、調査協力者が目に涙を浮かべたのは、この場面が意識の次元における自分自身との会話、すなわち「内的会話」（Andersen, 1991）を促したからではないかと推測される。実際の過去は、むしろ紙芝居に描かれている通りではなかったであろうが、絵が過去を想起する手がかりになったのではないかと考えられる。

第3に、上演会終了後、制作した人生紙芝居を調査協力者に贈呈して喜ばれた点である。これは、文章だけでなく絵があることで親しみやすかったように見受けられた。筆者は作画に関しては素人であるが、調査協力者のニカラグア人夫妻だけでなく、コスタリカ人、そしてNGOのボランティア活動に参加していたアメリカ人・カナダ人にも、異文化である「日本のイラスト」として興味深いものに映ったようであった。生活史の聞き取りを行う調査においては、本研究のように人生紙芝居の制作を目的としない場合であっても、記念品として調査協力者へ人生紙芝居を贈呈することが謝礼になりうるのではないかと考えられる。

紙芝居のストーリーに組み込まれるのは人生における多様な経験の一部ではあるものの、それらは人生の骨格に当たるものである。Epston & White (1992) が述べているように私たちの経験世界がナラティブによって意味づけ可能であるならば、人生紙芝居の制作は、経験を整理し、意味づけ、そして他者と交流する手段となることから、生活史の語り手自身にとって意義のある行為であると考えられる。本論では、人生についての紙芝居と、紙芝居の制作過程とが心理的支援の機能を有している可能性が示唆された。ここでは、人生紙芝居というものにまつわるすべての過程を「人生紙芝居」という心理的支援技法として位置づけたい。今後、この技法の効果を検証する過程を含めた研究が求められる。

## 付 記

本研究の調査にご協力くださいましたみな様に心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- Andersen, T. (1991). *The reflecting team: Dialogues and dialogues about the dialogues*. NY: W. W. Norton & Company. (鈴木浩二(監訳)(2001). リフレクティング・プロセス: 会話における会話と会話 金剛出版)
- Anderson, H. (1997). *Conversation, language, and possibilities: A postmodern approach to therapy*. NY: BasicBooks. (野村直樹・青木義子・吉川 悟(訳)(2001). 会話・言語・そして可能性: コラボレイティヴとは? セラピーとは? 金剛出版)
- 安藤清志(2009). 否定的事象の経験と愛他性 東洋大学社会学部紀要, 47 (2), 35-44.
- Atkinson, R. (1995). *The gift of stories: Practical and spiritual applications of autobiography, lifestories, and personal mythmaking*. Westport, CT: Bergin & Garvey. (塚田 守(訳)(2006). 私たちの中にある物語: 人生のストーリーを書く意義と方法 ミネルヴァ書房)
- Bruce, E. (1999). Holding on to the story: Older people, narrative, and dementia. In G. Roberts, & J. Holmes (Eds.) *Healing stories: Narrative in psychiatry and psychology*. Oxford University Press.
- Elliott, J. (2005). *Using narrative in social research: Qualitative and quantitative approaches*. London: Sage.
- Epston, D., & White, M. (1992). A proposal for a reauthoring therapy: Rose's revisioning of her life and a commentary. In S. McNamee, & K. J. Gergen (Eds.) *Therapy as social construction*. London: Sage. (書きかえ療法ー人生というストーリーの再著述 野口裕二・野村直樹(訳)(1997). ナラティブ・セラピー: 社会構成主義の実践 金剛出版 pp.139-182)
- Frankl, V. E. (1969). *The Will to Meaning: Foundations and Applications of Logotherapy*. NY: New American Library. (山田邦夫(監訳)(2002). 意味への意志 春秋社)
- García Márquez, G. (2002). *Vivir para contarla*. Barcelona: Carmen Balcells. (旦 敬介(訳)(2009). 生きて、語り伝える 新潮社)
- 石山幸弘(2008). 紙芝居文化史: 資料で読み解く



- 紙芝居の世界 萌文書林
- 堀田 亮・杉江 征 (2013). 挫折体験の意味づけが自己概念の変容に与える影響 心理学研究, 84 (4), 408-418.
- JOICFP (2014). アフリカ地域における住民参加による HIV/エイズ啓発活動強化プロジェクト <[http://www.joicfp.or.jp/jp/project/operation1/project\\_map/africa/](http://www.joicfp.or.jp/jp/project/operation1/project_map/africa/)> (2014年1月5日)
- 糟谷知香江 (2009). コスタリカにおけるニカラグア系移民 いわき明星大学人文学部研究紀要 22, 75-85.
- Kasuya, C. (2012). Un enfoque narrativo sobre las personas inmigrantes en Costa Rica: Utilización de una técnica cualitativa de origen japonés. *Actualidades en Psicología*, 26, 1-13.
- 小平英志 (2007). 幼児の紙芝居への反応：反応パターンの抽出と生起する文脈の検討 研究紀要 (名古屋柳城短期大学), 29, 31-38.
- López, L. A. y Pernudi, V. (2007). Prejuicios y actitudes de los costarricenses hacia los inmigrantes nicaragüenses. In I. Dobles, S. Baltodano & V. Leandro (Eds.) *Psicología de la liberación en el contexto de la globalización neoliberal: Acciones, reflexiones y desafíos*. San José: Editorial de la Universidad de Costa Rica, pp.316-328.
- McNamee, S. & Gergen, K. J. (1992). *Therapy as social construction*. London: Sage. (野口裕二・野村直樹 (訳) (1997). ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践 金剛出版)
- まついのりこ (1998). 紙芝居・共感のよるこび 童心舎
- 三澤文紀 (2008). リフレクティング・プロセスへ向かう道－家族療法からリフレクティング・プロセスへいたるプロセス－ 矢原隆行・田代 順 (編) ナラティブからコミュニケーションヘーリフレクティング・プロセスの実践 弘文堂 pp.23-40.
- 野口裕二 (編) (2009). ナラティブ・アプローチ 勁草書房
- Nonaka, D., Kobayashi, J., Jimba, M., Vilaysouk, B., Tsukamoto, K., Kano, S., Phommasack, B., Singhasivanon, P., Waikagul, J., Tateno, S., & Takeuchi, T. (2008). Malaria education from school to community in Oudomxay province, Lao PDR. *Parasitology International*, 57, 76-82.
- 野坂悦子 (2007). 紙芝居のいま, これから 世界でさらに強く羽ばたくために－IKAJAの5年間を通じて－ 子どもの文化, 39 (7), 140-144.
- 奥田真美 (2006). 宅老所「みんなの家」(西伊豆町)における創作紙芝居の取り組み 遠山昭雄 (監修) はじめよう老人ケアに紙芝居：観ること、つくること、演じることの楽しみ 雲母書房 pp.140-161.
- Sandoval, C. (2002). *Otros amenazantes: Los nicaragüenses y la formación de identidades nacionales en Costa Rica*. San José: Editorial de la Universidad de Costa Rica.
- 鈴木常勝 (2005). メディアとしての紙芝居 久山社
- 田代 順 (2008). 学校コミュニティへのアプローチ－「いじめ」を語り合う生徒と教師が話し合う・聴き合う・目撃し合う－ 矢原隆行・田代 順 (編) ナラティブからコミュニケーションヘーリフレクティング・プロセスの実践 弘文堂 pp.85-106.
- ときわひろみ (2007). 紙芝居とは 手づくり紙芝居の世界 子どもの文化, 39 (7), 87-91.
- 上地ちづ子 (1997). 紙芝居の歴史 久山社
- White, M., & Epston, D. (1990). *Narrative means to therapeutic ends*. NY: Norton. (小森康永 (訳) (1992) 物語としての家族 金剛出版)
- Winslade, J. & Monk, G. (1999). *Narrative counseling in schools: Powerful and brief*. Thousand Oaks CA: Corwin Press (小森康永 (訳) (2001). 新しいスクールカウンセリング－学校におけるナラティブ・アプローチ 金剛出版)
- 矢原隆行 (2008). 「会話についての会話」というシステム 矢原隆行・田代 順 (編) ナラティブからコミュニケーションヘーリフレクティング・プロセスの実践 弘文堂 pp.3-21.
- (2014. 1. 7受稿, 2014. 1. 27受理)

## A reflection of experience from narrative-based approach: Life story review using a Japanese picture book

Chikae KASUYA

This article reports on offering a qualitative technique of Japanese origin named “kamishibai of life,” which is a kind of picture book, in Costa Rica. In field research at Costa Rica, the author interviewed with a Nicaraguan couple who lived in a marginal community, about their experiences in life. A kamishibai-book made by the author from their life story was showed in front of the informants and their family. Some hypotheses about advantages of the technique were generated from narrative-based approach: (1) the technique places immigrants' experiences of life in chronological order, (2) informants understand the meaning of experiences from the perspective of the individual involved, (3) the technique functions as a way of communication, (4) the book with pictures can convey contents to individuals who don't have the ability to read and understand, e.g. infants. This article suggests that the “kamishibai of life” book and the process of making “kamishibai of life” could serve the function of psychological support.

**Key words:** case study, life story, immigrant, Costa Rica.